



TITLE:

郷土讀本に就いて

AUTHOR(S):

本間, 不二男

CITATION:

本間, 不二男. 郷土讀本に就いて. 地球 1930, 14(6): 434-438

ISSUE DATE:

1930-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183845>

RIGHT:

昭和五年八月

岡山 俊雄

中央日本山地の切峰面及區分 地理學評論 第六卷 昭和五年六月

大橋 良一

褶曲と陸塊運動 地理學評論 第三卷 昭和二年十一月

篠田 恭三

西南日本中央構造線に沿つて分布する白堊紀以後の地層 地質學雜誌 三十七卷 昭和五年九月

月

郷土讀本に就いて

本間 不二 男

柴田良一氏著作の秋田市外旭川村の地理を書いた「我が住む村」の紹介は既に本誌になされた所である。筆者は此の書を手にして以來小學生に課する郷土讀本の重要性を心から感じ出したので全く専門以外の事ではあるが、左に抱懷する所を述べて、稍もすれば現代の世風に壓されて萎縮せんとする傾向のある一部の中小學校職員に對する刺戟劑としたい。

輓近郷土研究の甚だ旺となり、所謂高級なる専門地理學書を遙に抜いて大衆的地理書のしきりに公刊せらるるは單なる模倣の境地から脱却して日本獨特の地理學を建設せんとする努力の現れと見るべきであらうが、更に其の底流をなして暗黙の間に働いてゐる意識は今迄の模倣文化から離れて我國の環境を調和した日本獨特

北原寛外三名 下伊那郡地質誌

地質調査所 七萬五千分ノ一地質圖 足助、多治見、豐橋、伊良湖岬、相良、設樂、惠那山、並に足助圖幅

説明書

地質調査所 四十萬分ノ一地質圖

市瀬八代吉 飯田盆地及段丘 地理學評論 大正十五年三、

四、五月

の文化景觀及び産業組織を建設せんとする國民意識の一表現に外ならぬものと思はれる。即ち模倣から創造への轉向期に當つて先づ我が環境を熟視せんとする傾向が其の儘地學の勃興となつて表はれたのであるから、地學は新日本文化の建設期に當つて今後久しく興隆すべきものであると共に此の大事業は單に地理學專修學者に委すべきではなく、諸々の専門家が各方面から環境の新開拓に對する提案を試みるべきであらうと思ふ。

茲に記述する拙文は本年十月三、四、五、六日發行の信濃毎日新聞紙上に載せたものであるが新文化の建設に當つて村民讀本の甚だ重要な事が痛感されるので更に其の必要な所以を述べることとした。

自然科學の一分科たる地質學の研究だけで筆者は小山進氏と共に信濃中部に於いて既に十年を費やして仕舞つた。此の體驗に省れば一縣一郡の地質調査にあたつては數十年或は十數年を

費やして輕うじて稍々實用に供し得るものを造り得るに過ぎないのである。然るに之を一村或は一學區に區分し中小學校職員の仕事に移し、之を指導するに更に専門の人を以つてすれば遙に短年月を以つて之を行ふことが出来る。若し中小學校の各員が各方面の研究を擔任し専ら其の郷土に就いて研究し、然る後に村民讀本を編纂して小學生に讀せば成人の後彼等が其の環境を開拓するに當つて益する所あるべきは元より明かである。

思ふに交通機關の發展と共に今後人類の移動は益々甚しきを加ふると雖も、尙ほ大部分の人々は誕生の後其の故郷に一生を送るは疑ふの餘地なき處である。従つて彼等に取つて第一に必要な事は自身の生存する環境を熟知することである。然るに其自然的環境の一部分たる、地形地質、生物の分布等に就いても其の一村の全域に亘つて智識を持つものが少く、又た人文又は經濟的環境に關しては自村に生産する物資に何處に於いて如何に消費せらるるか知るものが少

ない。此の如くして環境の新開拓を望み、新たな生産物の工夫を希ふは寔に百年河清を待つる類にして、若し之を望まば先づ環境に關する完全なる智識の涵養から始めなければならぬ。

然るに今日生業に従事する成人は家族を糊口せしむべき緊急なる業務の爲め殆ど他を顧るの暇なく、自己の業務の環境に不可なるを知るも最早之を革むる事能はざるの狀態にある人が多いのである。従つて農工商業者の何れたるを問はず自己の甚大なる努力にも拘らず其の生業の次第に頽勢に傾き其の如何ともすべからざるを嘆ぜらるる人があるであらうが、之は何等かの意味に於いて環境に適せざる生業を營んでゐるのである。

故に環境に對する基礎概念は個人に對しては職に就くに先立つて與へられねばならぬのである。即ち郷土讀本を各市町村の小學生に與へる所以は實に茲にあり、此の如くして十年或は二十の後我國民生活上に環境に順應した光輝ある新生面が始めて拓かれるものと思う。

省るに寔に人類の生活は地球中岩石圈と大氣圈との境界面に行はれ脚は常に岩石圈最表層上に固着し身體は大氣圈の最下底二米足すの處に突入してゐるのである。従つて我々の生活を支持する最も基礎的要素は大地と大氣と之を通して我々に達する日光とであつて其の他の何物でもない。此の内日光と大氣とは無償にて與へられ且つ之は土地に即したものである。唯土地のみは人類が何等かの協定によつて分割し個々に獨占して、此處に誕生し、成人し、生業を營んだ後死滅して行くのである。

近來交通機關の發達と共に一地區に最も適した生業を營めば、其の生産物は容易に各處に輸出されて安易なる生活が保證されると共に自給自足の時代に必要に迫られて不自然に興つた生業は速やかに衰滅しなければならぬ運命に遭遇してゐる。

即ち我々のよく知らなければならぬ事は人類の生活は自然に逆ふにあらず、之に應ずる事に

よつて最もよく達成されるのである。故に産業の合理化と稱して或は人件費を削減し或は金融の圓滑を計るは抑々末にして、此の如き努力の如何に關らず其の環境に適應せるものは遂に滅亡すべきであるから、其の根本は實に組織の改革にあらずして、先づ産業自體の取捨であり、新販路の開拓である。従つて土地の開拓も商工業の考案も環境を熟知してから後に始めらるべきである。然るが故に郷土及び其の郷土と關係ある地域に關する知識を盛つた郷土讀本の編纂が望ましいのである。

今地質學的の關係のある著者の目撃した悲しむべき一の例を舉ぐれば姫川沿岸なる長野縣北安曇郡南小谷村の某所で水を吸収すれば迂り出す泥岩地域に於いて地迂りによつて生じた上段に水田を作つてゐるのである。此處では春水田に水を引き晩春から夏期に入れば之が迂り出し屢々收穫を不能ならしめるのである。然しながら、此の土地の農夫は其の因習の久しき、遂ひに性をなし、年々地迂りの起つてゐる現象を認め

ながら、その田畑に被害が與へられた時でなければ之を地迂りと言はぬのである。此の如き心理狀態が農民を支配することは決して彼等によつて幸福なことではなく之は寔に淀む水は腐るの譬へに洩れぬことになる。而して現に之と同様の地質より成る犀川の支流土尻川沿岸では此の如き地域は麥畑となり、地迂りを起さぬ砂岩帶は櫛葉樹の雜木林となつてゐるのである。又た日本酒の花崗岩地區に産し、川魚の古生層地區に於いてよく育ち且つ美味なるは恐らく多く人々の經驗せらるる處であるが、此の如きも亦た地質に關係ある興味ある事實である。従つて我々の專修する科學の立場から言へば村民讀本には精細な地質圖を附する必要があるものと思はれるのである。而して既刊二十萬分の一地質圖は一地域の生業を考察の基礎となす地質圖としては甚だ價值の乏しいものであるが、目下地質調査所に於いて刊行されつつある七萬五千分の一は此の目的に對して大いに役立つものである然し其の完成は數十年の後にあるのであるから

各村に於いて適當な指導者を得て特に努力されることが望ましい。

郷土讀本は一市町村を單位とすべきも大都市に於いては一、二學區を以つて一單位とすべきである。例へば京都市に於いては鴨川以東の勝景區域、中央の商業區域、西方及び南方の工業區域は何れも地理的環境の著しく異なる所であるから、之を各々に分けるべきは勿論各地區を更に二、三に分割して郷土讀本を作ることが最もよいと思ふ。例へば東側に花崗岩の山をひかへ其の大半が石工なる北白川と、古生層の山麓に寺院のみが立ち並び之によつて居食する東山山麓の住民とは自から其の環境と自己との關係が

著しく異なるからである。此の如く小地區に分けて郷土讀本を編み一卷百頁とし圖版二三箇を挿入するも初版千部とすれば恐らく三、四十錢の費用を以つて出版し得ると思はれる。之を三、四年毎に改版、次第に精選されたものとすれば其の環境に新開拓に對する効果は甚大なるものであらう。

實に一國の興隆は一村一町一市興隆の全體の結果に外ならぬものであるから、此の如き方法も又た以つて十年或は二十年後國家を興隆せしむべき有力なる一方法たるを失はぬ。又た此の編纂は各郷土にある小學校職員諸士の有効にして手頃なる仕事と思はれる。

伊賀盆地に於ける墓地の地理的考察

辻井 浩太郎

一、緒言

二、墓地の特相

三、分布

四、史的考察の一端

五、地理的考察